

先史琉球の貝珠と貝玉文化

貝珠再論

Shell Beads Culture of Prehistoric Ryukyu

木下尚子

KINOSHITA Naoko

はじめに

- ①大池遺跡 A 地点の貝珠
- ②奄美群島と沖縄諸島の貝珠
- ③先島諸島の貝珠
- ④種子島の貝珠
- ⑤先史琉球列島の貝珠と貝玉文化
- ⑥貝珠が語るもの

【論文要旨】

本稿はトカラ列島宝島の大池遺跡 A 地点の貝珠の分析を糸口に、旧稿「東亜貝珠論」の琉球列島部分について、新資料にもとづいて再論するものである。ここでの貝玉は孔をもつ貝製の玉全般をさし、貝珠は貝玉の中でも、おもに小型のイモガイの貝殻を回転研磨によって円筒形に加工した玉をさす。貝珠を含む貝玉は先史時代の琉球列島全域に普遍的にみられる遺物である。

今回分析したのは、紀元前 3300 年から紀元 1000 年にわたる時期の 10 遺跡の貝珠である。分析の結果、製作技法、系譜について以下を指摘した。

- ・大池遺跡 A 地点の貝珠は縄文前期末から中期のもので、製作には回転研磨とともにこの地独自のベッキングによる穿孔が認められる。
- ・奄美・沖縄地域では研磨により穿孔された貝珠が、縄文中期後葉から後期前葉に独自に生まれた可能性が高い。研磨穿孔の技法と擦切技法が組み合ってこの地に特徴的な貝器文化が展開した。
- ・宮古諸島では紀元前 1 千年紀（無土器期）の 2 遺跡を検討した。2 事例の一方には貝珠が多いがもう一方にはほとんどない。技術の系譜では沖縄諸島とそれ以外の地域との関係が考えられる。
- ・八重山諸島では紀元前 2300～1300 年に研磨穿孔による完成度の高い貝珠が作られる。系譜については、同時期の台湾の貝珠との関係が考えられる。
- ・大隅諸島の広田遺跡では、紀元 300～400 年頃に精緻な装身具セットの一要素として貝珠が登場した。先行研究によって南島、本土、大陸との系譜関係がそれぞれ提示されている。

貝珠を通して見えてくるのは、琉球列島内の地域ごとに異なる文化の系譜である。琉球の先史文化は、慶良間海裂を挟んで南北に対峙し、それぞれ南下あるいは北上する方向性をもつことが広く理解されているが、貝珠のあり方はこうした図式と必ずしも一致しない。琉球先史文化の構図の中に、土器文化を通して見える方向性や共通性とは異なる多元的な系譜が含まれていることを述べ、旧論を一部修正し補足した。

【キーワード】 先史時代、琉球列島、貝珠、回転研磨、研磨穿孔